４　商業の教育支援事業【活動支援事業】報告書

テーマ「社会の発展に寄与する人材の育成」

１ テーマ設定の理由

本校は創立１２０周年を迎える節目の年であり，大隅地域における商業教育の中心的役割を果たしてきた。また，地域との結びつきも強いため，歴代の開発商品が身近にあり，地域貢献活動も盛んに行われてきた。今後１０年間の高校生の生徒数は，1,000 人から 1,100 人を各年の増減を繰り返しながら，緩やかに減少していくことが鹿屋市の統計資料に示されている。その中でも毎年「串良商業高校で学びたい」と生徒が入学している。

そこで，その生徒たちの学びへの期待（教育需要）に対し，どのように本校（商業教育）で応えるかが，今後の課題だと考えている。

以上のことを踏まえ，コロナ禍でも地域や社会の人材との接点をもつ方法を模索しながら，地域や社会の発展に寄与する人材を育み，生徒が自信と誇りをもてる商業教育を実現したい。

２ 実施計画

４月　活動企画の策定
５月　鹿児島県生徒商業研究発表大会に向け準備
６月　鹿児島県生徒商業研究発表大会に向け準備
７月　鹿児島県生徒商業研究発表大会に参加
８月　鹿屋市主催 かのや１００チャレ（政策アイディアコンテスト）に参加
９月　科目「商品開発」にて協力企業と商品を試作
10 月　科目「商品開発」にて協力企業と商品が完成
11 月　科目「電子商取引」にてＷＥＢページを制作
12 月　科目「電子商取引」にて串商ショップ の完成・公開
１月　くしら二十三や市（校外販売実習）・中学校への出前授業
２月　課題研究で成果・課題発表

３ 実践報告

○ 「ふるさと納税で鹿屋市のファン作り」（３年生　課題研究）

【返礼品で税収アップ】

鹿屋市のふるさと納税の課題としては、新たな納税者の獲得と寄付者が持続的にふるさと納税を行ってくれることが挙げられた。そこで，私たちは【高校生らしい新たな返礼品を考えることで寄付者の増加と持続性に繋がる】という仮説を立て，検証した。

【体験型返礼品】

観光名所を１カ所にしぼり「かのやばら園を高校生が案内する」体験型返礼品を考えた。この体験型返礼品を選んでいただいた方へ特別感を感じてもらえるよう，５つの付加価値を提案した。

案内ルート

花かんむり

ポストカード

ティータイム

ハーバリウム制作

【今後の課題】

話し合いを進めていくうちに，高校生自体がふるさと納税の返礼品を出すことは難しいということ分かった。そこで，ふるさとＰＲ課の方からローズリングという業者とマッチアップして体験型の返礼品を出すことは可能だというアドバイスをいただいた。今後はその業者と連携し，時期や時間・経費など細かいことを決めていくことや私たちの園内ガイドのスキルアップが課題となる。

○ 地域の協力企業と実現した商品開発「串密バーム」（３年生　商品開発）

　コロナ禍でストレスが溜まりやすくなっている昨今，癒やしを提供するアイデアを出し合う中で，アロマを使った商品を開発しようということになった。そこで，蜜蝋を使ったアロマ商品開発をするためにボタニカルファクトリー（協力企業）へ行きました。

　商品開発は地元産の蜜蝋バーム作りをすることにしました。成分の中には鹿児島県産のツバキ種子油・タンカン果皮油・蜜蝋を使用。蜜蝋（ミツロウ）は主に，床ワックス，革製品のメンテナンス，ろうそく，クレヨンの材料として使われています。 また，蜜蝋（ミツロウ）の成分には保湿性があるので，リップクリームやハンドクリーム，化粧品の材料にも使われています。

○ 科目横断型の取組（３年　電子商取引）

　科目「電子商取引」でＨＴＭＬやＣＳＳを学習した生徒たちが科目「商品開発」で生み出した「串蜜バーム」の商品の Web ページを作成し，１２月から公開している。

Ｗｅｂサイト「串商Ｓｈｏｐ」ＱＲコード

※学校ＨＰからも閲覧できます。

○ 政策アイディアコンテストの参加および「卒業生」からのご助言ご指導（２年生　課題研究）

　鹿屋市が主催する政策アイデアコンテスト「かのや 100 チャレ」へ２年総合ビジネス科の課題研究の一環として４チームが参加している。取り組む中で，企画をどのように進めていくべきか。鹿児島県よろず支援員でもあり，本校の卒業生でもある西崎千鶴様をお招きし，商品開発のノウハウなどを教わった。

　鹿屋市の新たなお土産の開発ということで「既存の商品を飲み物にしたら面白い！」という発想のも株式会社フェスティバロ社へ営業した。企画の立案から試作品づくり，そして鹿屋市への提案を行った。

4 まとめと今後の課題

　次世代の地域社会を担う人材の育成にあたって，大切なことは，学校が，地域人材と生徒の接点や機会をどのように設けるかが鍵になるかもしれないと考えている。今年度の取組では，生徒たちの人間的な成長が見られたのが嬉しく思うと同時に，今の時代に必要な資質にも気付けたようにも感じる。

　今後の課題としては，商業科教員が主体的となって，地域人材を活用しながら，新たな形の学ぶ機会を生み出すことかもしれない。